

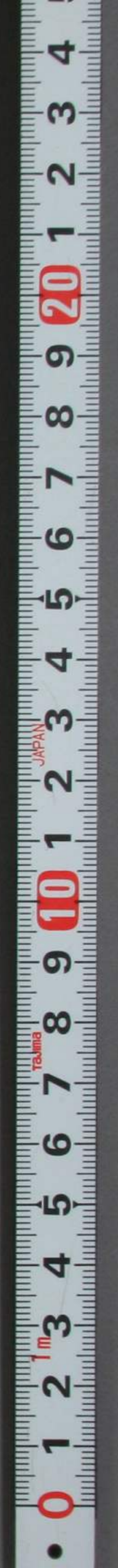


淀屋形金雞新話

前編
四



特別
13
3521
4



門 13
3521
巻



昭和二十九年
七月九日
購取

淀屋形金雞新話卷之四

東武岳亭主人武編

卯木仕縣令

難波の浦の縣令官大滝左門の佐南都般若寺の万
福上人との師檀の因ありたるゆゑ時々の消息を
りり玉ひらるるげ般いりり内密の裏ありて左門の佐
て南都ふちのむね艦若寺ふりり上人小密の
語くせりり斯て要をて後吃茶の侍言ありて
酒飯とも出さるる文雅の物ぐるり四方の俗談
て後上人一人の浪人体の男と呼びりり左門の佐小見

金雞新話

て上人曰ひくは是のころ洛陽ぐる然堂上仕へ者あて
 名を卯木佐和弥太と号し侍ふ薄命あつて流浪の久
 しく吾寺小舎匿ち侍ふ者あつて文武のまじりて
 ぐひまで此の心得あるまの貧道よく例にあたり侍
 小御役ゆも立べ死者あつて願ふ縣令は者をめり揚りて
 御臣士の数ゆも加へら玉りて世に有ぐらに御恵まふこそ
 侍ゆと餘義もろく曰ひくは左門の佐是を嘗て旦は者
 をみるふ相見骨柄むあぶんの仕士にてのやかふる光景も
 了くは頻て上人ふ向ひ答へて曰く外よりぬ老師の仰ふ侍へ
 を假令當人はいらる者ゆもあはれ今日より臣下ふ加へらる

福徳心さくくへ御心交く思ひめ玉のべると言さるるあそ
 万福上人是を嘗て手天小情怡あひ其日のさく待管あひ
 左門の佐も其夜の御寺小一宿し次の日まごたふ立出つ彼佐
 和弥太を伴ひて浪花の浦ふを帰らむる斯て左門の佐
 数々の臣下をめり集めて卯木を引合せ万福上人の頼ま
 小よろけは者を臣下の列ふ加ふるると言はるる一人の臣下
 佐和弥太が身の上の事をよく知る者あつて密か小別
 室ひて左門の佐小語りたる彼卯木佐和弥太と号はる
 日外吾妻屋が古井を穿ちて許可の人の命を失ひ其座
 より逐電しる者あつて侍ふと教語たる小左門の佐をめぐて

是を悟り斯ての善しからざる者なり然と上人より頼むる者
 者まれば今急ふも追放ちかき時を見て決絶を遣はるべ
 しといひて頓て又佐和弥太を呼ぶ汝が更上人の頼
 むふよりして臣下ふに加ふるといふも此れ思ひ上旨あはけ
 後漫ろふ他行をまへるは唯々家中ふあうて忠勤をまひ
 むべと日ひたれば佐和弥太も拜伏して命心得侍ひぬと答
 言して退死するが卯木心中小思多う主人吾とて他行を
 止めぬし吾身の上の更を豫め知りての更なる吾も又
 漫ろふ外面を出歩るが極めて彼古井ふて死する者との
 一宗一族小見付らむと倘許へらる更あはば身の出世の妨げ

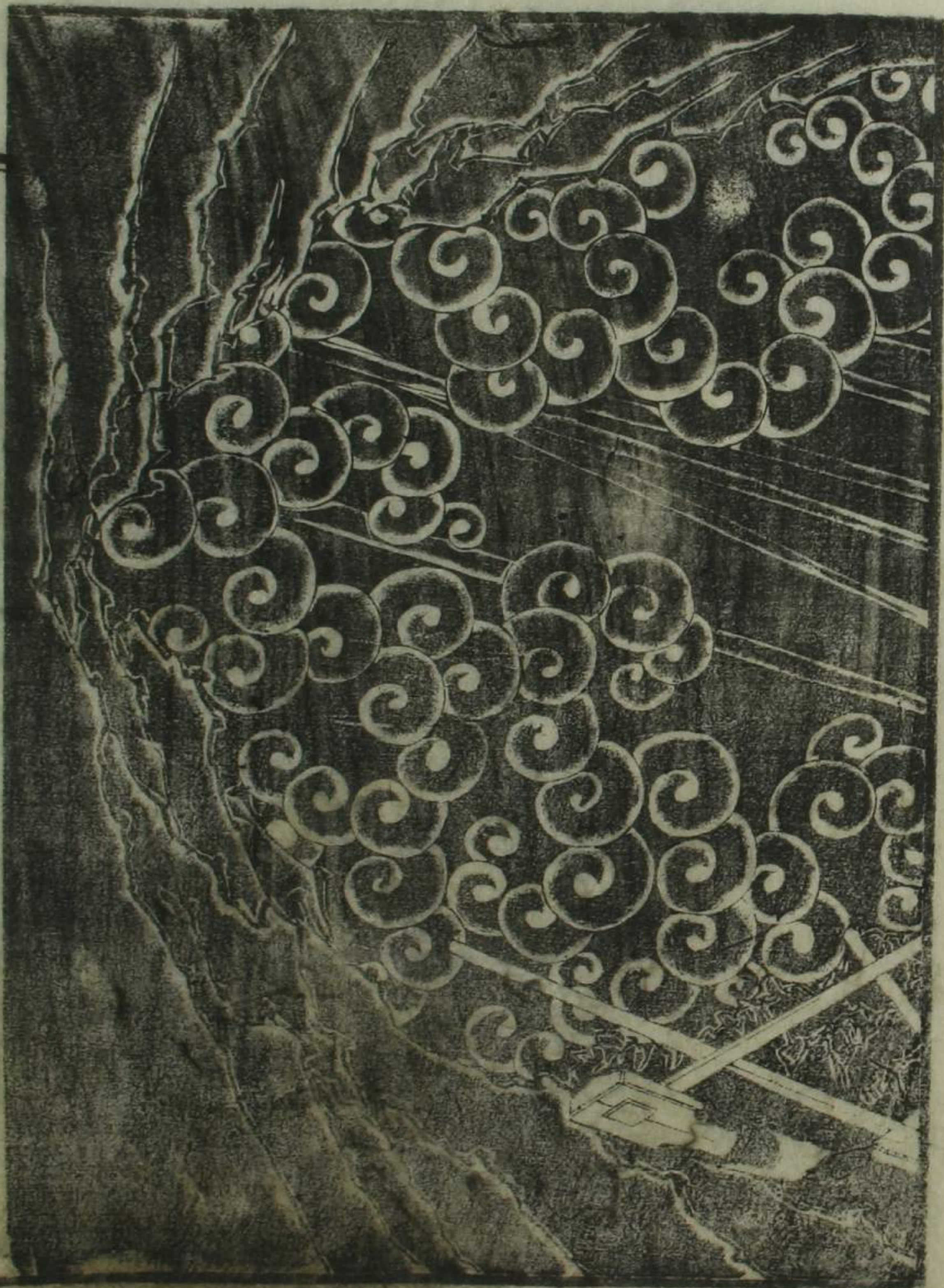
ろろ暫く他行を止らむるの傍俸の更なる密ろふ喜喜
 居ろろけり左門の佐いば佐和弥太を時々めして文武の道
 んと論ぼる小其吞へも明ろろろ小其外も多透ろろ殊小手書
 ころ小拙ろろろろろを何ふまると能同小あひて調宝小思ひ
 ろろ小ぞ時々の公更政更るをも同合せあふ小其吞へのみ
 死方の小理小惚へる更のこ多わろろろ小ぞ佐門の佐もたの
 小情び後后のよ死片挽入小ぞ思ひのせらる

鎮怪異得金

却説先年洛陽にて東山小名水を穿得て將軍より種々
 の書買物あろろ浪速の井戸屋滝右エ門のまほろろ家と

栄え行て何れもかゝる怪事しけり近來吾家居ちた死お
 吾妻屋東作が旧屋の古井の中より夜まじく光り物あら
 りくを見て夜ふりつていけ邊を人の通らざることを愁ひ然
 を吾家小傳る死の秘術まのりて此井の毒氣を去光り物の
 怪しきと止め万人のうしろを除くべしと思ひ立地ふこのよ
 縣令の廳小訴へ出々せし縣令大滝左門の佐りることをせめて
 殊勝の思ひ立感心せり疾々古井の怪しきを去て衆人の愁
 ひをのぞくべし尙成就小及びありく因心賞を与ふべしといひ
 たり小を滝右工門のわかれとて廳前をまうぞたたり斯て四五日
 をへて滝右工門の懸てまうぞとる人夫らに教し人諸方より

呼ありめ吾家の庭のうち小新ら小大ゆる穴を穿ちその
 穴の底より横穴をり行くとおろしそ四丁をかり日殺せたる
 こ八十日をかりふて竟小彼吾妻屋古井の底小堀あ
 てよりけ時滝右工門大勢の人夫小銃炮を二挺づ持せ十五
 人一時小吾妻屋古井の底を横穴よりつるかけけて打け
 れば寔小百千の雷鳴一度小落るるべりの立日鳴りそ
 毫落ること地響きさく彼古井の底より一道の白く氣流中
 小立昇り半空ゆくと消らせたり滝右工門の銃炮を尚も
 つるくけて平天小打込そ人夫ら小下知を傳へ其日のさると
 引とらり斯て二三日過てよう又其横穴よりつる行て彼



救授の
 決炮
 井中の
 毒氣を
 のぞく

古井の底に到りたる今其毒氣さうふる焦火をうりて
らして井の底をよやく見らるる数万の財宝をさく金の浪
らう高くうりて重りあり滝多のん人夫ら小指揮してこの
財宝黄金をものく吾家の庭上小をさび出させたるふ
ぞ更ふ世のん人知るまう斯く後彼古井より光り
の頭よりまう又止ふたり斯て滝多のん僅百
日を往ざり間中忽ち二十余万兩の黄金を得るけり
且十余万兩の吾方小よりかへ漸々五六万兩をかり縣令へ
さし揚々左門の佐是を見て頻り小滝多のんが手
の程を賞しめ其地の莊官をよび多のん吾東屋が行る

を訊ぬる多のん吾妻屋一家の死をえて其跡もまじ侍
り候と御答へ言々小ぞ去むとて三万兩の軍用のさし縣
令の宝藏小をささり三万兩の滝多のん小給たりたる小ぞ
滝多のん大の情ひ縣令の恩を謝し三万兩を奴子小
擔いせ吾家をさしてとて暖りたる卯木佐和弥大なることを
彼て大のふおごりた彼井戸屋滝多のん抑何ホの術あ
りて斯る不思議をさす物々吾の彼古井のさあふま
るの人を損ひ竟ふけ地を逐電し今斯くくの禄あり有
つたうとの漫りふ白昼を歩きさうま引久滝多のん
た彼古井のさあふ縣令の賞義ふあがわり若干の黄金

とらる是是まきゆ天の鳥とこころと云ふるがう然も口借きこと
らうか一方望時を見合せて井戸屋一家の奴がう小憂目
を見せて版のんりのと牙を噛ても居らうらう

好子逢佳人

爰小又神寄川のやうゆ宅原高舟とゆるる医師あり一
人の娘をのちて名を小笹とよびぬ今年二八の世の顔こ
び笑が百の媚を生じ六宮の粉黛顔色と云けんも斯
る次女やのふるんと衆人賞し敢りけりけ高舟あり人
とのめめめあうさうさうさうの流石欲の深くて娘小笹が美
藤らうとめて万世玉よれた人の妻とてゆて黄金をむきりん

と豫て心小乖巧居る彼井戸屋滝をひんが子小滝
五郎とのあり原実子ありあうむ縉紳おん方より松戸を
まらる義子らむとて実の子よりも愛しとて大郎ありて
云てらるゆぞ其人品のやうかうは詩歌連俳香茶の道
何一ツううかうは圖基若さう花の楽しとあそぶより外要
もろく宅原高舟とゆるる家の茶の會ゆよむとらると井
戸屋滝五郎小出會入る小寔小是一箇の好男子あり然
もけ浪速小一のひて二ともの下らぬ井戸屋の一子とてけ
時高舟心中小思ふやう五口娘小笹の義面人るまゆめ勝
してらる者らるが此滝五郎の一目見せるがよも春心を起さる

支のあつて尚この滝五郎が妾とあるは相づつ本室とも
ある支あつて生屋の衆と出世の極り唯け時ふ有べしと
忽ち一箇の討り支を思ひつた滝五郎ふ向ひ明日吾家の
て二席の茶話のよやく度思ひつた願ひの夕暮より入興
あつて進めたるは滝五郎元未遊ぶ外用より男
らうたるが夫あり難き御まのた小預る者たる命小直の
夕ぐさより赤堂の候のんと約束して別とるりぬ高井
左次の日朝まがたより支度をとる人娘小笹を二邊小ま
ぬた五思ふ言を仔細小語り討りごとを云會りあは左右
して相待とるふ申の時過る頃ふ井戸屋滝五郎下

雑一人を俣つて宅原が詩へ入まゝたれを高井悟び
出迎へて真小通一但寒暖の礼をとりてのふやう今日一席
を催にべた約束よりを外々の茶友なる故障このあり
てまゝと詮方より茶席のまゝこの日のふこそ催さる然
る小井郎君の約をも違へあはに臨光を恵ませるま喜怡
るも小増こそ然るも唯一杯を献りて今日未臨の
よろこびを述べると願ひ郎君打つろ死て一盃を
しめしめると言ひ終る間小庵房より女ども種
々の酒肴をもて運び死せられたまで推双づる滝五郎こそを
見して尊老のつらむが斯のごく過分の待管つらふむごや

と云々多しの高井が曰く今け雅波の御おての一とのひてこと
 も下らと井戸屋の郎君滝五郎ぬくの御へるまがけ御
 めこの時天子の臨幸も同てこの待管奉でい有べうはとまう血
 を把て宿めたるふぞ滝五郎も元来好む酒を多しは是をうけて吃乾高
 舞ふ返進は是より不皿の教重りて滝五郎十分の酔を込にたつこの時
 既小日の全くおれて早燈甚小とゆ火を點じたりとた高井つと
 立て二間の裡より娘小笹をとめまひ出滝五郎小見えそ
 めて云やう是愚老が一人の娘おて小笹とよび侍め今日の
 御番ふあつうらう琴の一曲を御咄ふ入あつうらうとて娘よ
 疾琴ひけと云々多しが小笹の最おもたるゆけ小琴把りて

調子を整へ想夫恋の一曲を太あそむと言ふ調べらる滝五
 郎け小笹をえんる小寔ゆ是絶世の佳人おて格面さちま
 ち春を生ぐ蛾眉さる小翠を猫く嬌嬈とて人の心を
 動さるの色あつ滝五郎惣然とて心中蕩け酔るごとく
 うりて琴の音色小笠とさ居うらとわくくして琴を弾くと
 ちり々多しの高井又小笹をちりく呼て歌をうら滝五郎
 不皿をとつて小笹よさぬ小笹は是をのさかたて一皿を過
 さく俯臥て耻うは小滝五郎ゆさく々多しの滝五郎又足
 をうりて一杯を吃は高井又家の裡の女どもを残りうらう
 呼ひて一個と酒を吞せたるが女ども勿忽ち酔て皆次

の間へ逃にげのうて其死爰そこに打倒たふせ前後も知しれ臥ふたり高
無なの打うちりしし儲たくわも益やくふらぬ女むすめどもも小笹こささよせめてゆるま
と爰ここに居ゐて酌しやくをとりに吳くれよりかると云いつく盃さかずきをとり揚あげて又また滝
五郎ごろうふさくまる滝五郎たきごろうも太おく酔よめらぬも旦あしたけの盃さかずきはうけのり
ぬ是こゝより尚なほ盃さかずきの数かずりをきりて夜よも早はや二更にじの過まりけり時ときり
らけ家いへの下した僕おれ慌あわ慌あわ忙いそ々いそと駈かけまり高たか無なが前まへにに両りやう手てををり死
唯ただ今いま伊丹屋いたんや坂さか右みぎ門かどどの老母らうぼ急いそ病びやう小ことり迫つめ侍さむらいへを御
見みまりひ下くださるべしとて御ご迎むかへし小こ太た太た侍さむらいふな何なにあそををとととと
侍さむらい名なと太お息いきつのでぞ速はやふら高たかと無な夢ゆめて儲の外らうぬ伊丹
屋いたんやの老母らうぼとあいひ行での恨うらみを汝なんぢの茶籠ちやうぶこを持て跡よりまれ

吾われの疾やま行ゆて見み舞まべしと云いつく滝五郎たきごろう小向こむかひ今いまの早はや夜よ半はん小
侍さむらいへを帰かへりぬふとうう難がた今いま宵よの吾われ方かたあて安やす敷し人ひと小生せうせい
今いま急いそ病びやう人ひとのあまの疾やま見みまりて立た地ぢにお帰かへり侍さむらいらん郎らう君きみの
旦あした一いつ歌うたあまべし小笹こささよ滝五郎たきごろうぬぬ小間こま末すえをのべて進まり
せよ吾われの伊丹屋いたんやまでい往いてらうらう鳴呼なげ世よの中ちゆうに小医い師しらどと
つつ死し物もののうらう斯かく夜よ中ちゆうにおもはとて病人びやうじんあまの行ゆでの恨うらみをは
方かたはまままやく能よ智ちとうては活かつ業ぎやうを止められのをと獨ひとり言ことをい
出いて行奴やつ子こも同おなじく薬やく籠ちやうぶこを引つらて出て行跡あとの家
の内うち滝五郎たきごろうと小笹こささのを唯たださらとい言ことをいふに云いはし産うぶ府ふ臥ふて
居ゐらうらうが小笹こささのやうく顔かほ打うちめらげ最早いちばや半はん夜よふらうらぬを

一 滝五郎 活業之日

合三

を滝五の君ふり安敷めひひ妻お圍をまつらんといふ
 て次小入清らるる襖ぞり美乗さ大衾を出し新
 枕をお死屍風引廻して出来り父君の御帰りの病人の容
 子小よれ何の時とも計りぐく侍るる滝君小の旦
 御安敷あまろくと云々の滝五郎の太く酒小酔小笹の
 御よわつた心を使ひあふる小生の太く酔らんが一睡りして
 高年無老の帰らるるを待べたると云つて立て次の室の屍風
 引のけ襦の上のわらわの小笹の大襖を打着せ進らる
 け時滝五郎何やらん言つる時小笹の頻り小笑ひたるか奈何
 ろらん出もこごと実や遠くて近れゆのの男女の中といふ

らん清女が華のささき小て昨日までも今朝までもあは
 知むる滝五郎と小笹忽ち同く襦ゆつて借老の契り
 ろは縁の怪りれゆの小ぞ有る

宅原逞医術

宅原高年が計策こつて竟小娘の小笹と滝五郎の深
 き中合とつりたる小ご高年大の小打時時々茶の會
 と号して滝五郎を呼迎へたる小ぞ滝五郎も又喜恰其後
 を宅原が宅小の之遊びさるる後々の父の高年無老の打
 明して小笹を合匿妻とりける者ふるお死月々の養ひ料
 を送り其外小笹が衣服調度揃かんざり小到るまで二が

まふく、拵へおつり高無母めま々の贈り物をも、滝五郎の日
 毎爰小末り小笹と高無母を相敵小酒酌るり、尋小唄るど
 小楽まらり、夜小入て小笹と禰を俱ゆり、比翼のちたる
 を交けける高無母の天を拜して打喜怡けける、唯滝五郎の
 欺して井戸屋の正室小爲んものと心ふうけてを樂ま居る
 了、或時滝五郎が父の滝右エ門不計風の心地よりして重死病の
 小打助たる小ぞ、渾家まらり、打おどろ死縁て出入まらるる
 相山古仙といゆる医師を迎へてまらり、瘡治をくまらるる、藥
 靈一向小功驗るる、病ひの増々重り行て、今命も危うくま
 らる人々手小汗握るる、滝五郎の父の病ひの危うたをりて

神小祈り佛小ねがひ心を確く時まらるは頃久く小笹
 が許へももう有る不計おのひ出して小笹が父の高無母
 を呼む入て父の病の容子を思せ能商議をまらると思
 ひ早卒小人をたせて宅原を迎へるる高無母のけ夏を死めて把
 ののを採あへむ大轎小のりて井戸屋小末り、滝右エ門が脉
 をとり、脈頭をさざりて熱々考へ少時ありて云やうけ病ひ
 原風より起り、つらとり人とも其より前小強く寒を引受
 そが上小又暑邪をうけ然して又密毒を受く、密毒との洞
 穴古井戸るとの毒氣あのを云うけ、三箇ののの脈中小あり
 て、まらり、菱せびりて有る、死小けるを新く小風邪をうけ、まらる



忽ち三箇の者を引出して斯る病ひを成らるる爰を以て
風を百病の長といひるる暑寒の邪氣と彼毒氣とあへまぜ
て戦ゆる故に版中燃るごとく手足の冷て氷のごとく二便
不通ゆして身中むくむ動く度ありは食事しても勿れ
吐却に嗚呼おそろしく愚老小見せぬ今宵小性をあつた
るを竟小黄泉の穴とてうめを今宵小性をあつた
あひの未しゆ命数の尽ざる死す神の引合せありあつた
を佛の導引めらるる今まで何人の薬を用ひぬや薬
あつた見せしとよとらぬ渾家の者即ち古仙がゆりたる死の
薬をさして見せしとよとらぬ高無是をひらき見て大い小朝笑

ひて曰く是は是國字方書を小兼る死の後世の俗方小
して把小足は斯る薬を呑ん度危れの甚し死す然る病
を得て医せざるを中医を得ると故人も云り又書を學ぶ
ぬ紙を費し医を學ぶぬ人を費すと漢土の書小見
えり斯る庸医のよめ小費さる可憐命を落さぬ度
豈悲まざるんや今け病ひ小生うけたりて速く小治し侍
らん個々放心あるべしと古書をのり病根を論へて
滔々として水の下流ゆつとて病人をたぐり瀆五郎
渾家の者らも一同小只管感とるをありたり高無頭て
薬三づく調令して出は三づく今宵の中小吞つとさす

あは 又つとめて御見舞まうまてと云置てあへうう
斯て井戸屋ふり其の夜う煎く其夜の中小版くをう
せたるを雞鳴の頃ふりうて勿心ち兩便とも小通れ
物るくう湯飯まてく食べたる小ぞ滝五郎の勿論
里澤家のもの皆一同小喜ひ敢るをううう然してう後
高舞の日毎小まつて診脈を究むひをううは版某ひ
小十日かありゆて枕を放し廿日たううゆて全く病の本
版おむびくろ小ぞ澤家一同小よろこび合つ斯て室原が方
への若干の謝礼をううう小ぞ高舞も又方の小悟懼は
功を云とて小吾娘を滝五郎が正室小遠くはぢぢ付ん

と心小わけてぞ居ううう滝五郎も小笹を家小呼わえ
て本室と云さんと思ひ或日番頭の道入といへる者をういて
吾豫てうう高舞が娘小笹と深き中うを以てこも吾
父君の病ひをも高舞精心をこまうて救ひうう彼宅
原と吾家とくべての九牛が一毛ううこのへども然もは是
老切の大医ううか又又文学子ゆめ未方でうう者るが深き娘
小笹を五世妻ゆううとて然もまで見苦しうたこのゆめ右
小に汝万望はけううを父君小説まわくせ小笹を吾正室
とてはやう小徳徳て呉ようくと余義もうう頼こうう小ぞ
道八の打ううづれた頓て奥ふりうて父滝右エ門小向ひけこ

のいで種々と侑りそこのかゝ小笹とて郎君の嫁君とま
 くあへとて執爲らるる小ぞ滝五郎のん答へて云やう彼高舟の
 空のえ高き大匠より旦去る日吾病ひを治しえとらるる思
 由あり又馬息滝五郎渠が一女小笹とやうんと豫てその言
 交しとらるとありと今更小縁をこらんと更の心も死爲らる
 不如今より小笹を嫁りて滝五郎と女夫ありて家を
 継せ吾の隠居るにべたうとらひらるる小ぞ道八の仕海しこ
 りと笑夫を合と頼てけ死を辞し去て滝五郎おけしと語
 りとらるる滝五郎のちの小喜怡道八を旨しとねむしひその
 夜立地小高舟が家小のこら小笹小斯と語りとらるる小笹

も父の老人も只管ふらち懼びその夜の酒宴を催して
 丑三つ頃まで談話し高舟の安敷くむむ小笹と滝五
 郎も閨房ふりり雲雨の交りひ浅くむむ次の日しまごた
 小起出滝五郎の身まつらるひ吾家をさして帰らるる然
 して後滝五郎のん氷人をこの高舟が方へ遣し小笹を
 嫁小まにべたありと云入らる高舟大の小情怡て早速小返
 辞をまし辞速く小整ひらるる小ぞ頼て井戸屋より結納を
 おく吉辰をこそ撰びむむ

淀屋形金雞新詠卷之四

